



ていまいに指導する右橋近匠

右近匠りといふことになった。現在は、弟子たちが機会を共同で運営し、橋派寄席文字を継承している。

明治36年に東京・芝浜松町の庭師の長男、相田兼吉として生まれた橋右近は、習い努力家であった。なお、この名前は、占い師につけてもらった商家時代のものをそのまま使っていた。もともと頓着の少ない人だったのではないが。

勘亭流も、江戸文字も

名人と呼ばれる落語家が、独演会などを開く。そんなときに看板を書かせてもらう。寄席文字を書く仕事をしていたよかつたなと思うのは、こういふときだと、橋右橋さんは言っている。「自分の文字を、名人が出る。なんとも言えずうれいんですわ」

右近師匠の七回忌がもうすぐやってくるが、「いまになって師匠に似せた文字が書けたとき、これも気持ちがいい」とも話している。

右橋さんは、落語関係の企画会社の経営者でもある。さらには、寄席文字以外の江戸の文字の研究に打ち込んでいく。

師匠の右近は、ある落語家から千社札のコレクションを引き継ぎ、その文字の伝承を心掛けていた。千社札は、お寺の門や天井に貼られている。細長い手摺りの札である。書体は、扁の羅や提灯の字とも相通じるもので、江戸文字と三つ。(なお、寄席文字もきめ

て江戸時代に発祥する文字を、広義に江戸文字と呼ぶ場合もある。)

師匠の関わりで、右近の弟子の何人が江戸文字を本格的に勉強したが、右橋さんも、そのひとりである。最近、江戸文字研究会を発足させて、「やるからには筋を通した本物をやりたい」と張り切っている。

寄席文字を巡るとふたつの書体に行き着く。そのひとつが江戸文字で、もうひとつは歌舞伎の看板で見慣れた勘亭流である。右橋さんは勘亭流家元二代目の教えを受けて、これまた研鑽を積み、芝井三鞭という由緒ある名を継いでいる。いまでは、地域の文化センターで教える立場にまでなった。

書道に吸収すればするほど、わからないこと、知りたいことが、どんどん湧いて出てくるみたいである。

高座の師匠の背後に姿えららしい落語の世界は、想像を絶するくらいに深く広い。なにしろ、相手にしているのは江戸時代ですからね。